

《研究ノート》

恒藤恭のヨーロッパ留学期における芸術体験

— 新カント派との関係を横にみつ —

久野 譲太郎

小稿は、法哲学者であり「戦後民主主義」の旗手としても知られる恒藤恭のヨーロッパ留学期に焦点を当て、とりわけ従来その重要性は指摘されながらも等閑に附されてきた彼の芸術体験について若干の検討を加えるものである。

恒藤は、その学問的發展途上にもあたる1920年代、約2年半を在外研究のためヨーロッパに過ごした。そしてその際、彼にとり重要な意味を持ったと思われる体験のひとつに、多くの西洋芸術との接触があった。事実彼は各地にて多様な芸術作品を鑑賞しているが、かかる体験はその学問的認識の発展に対しても影響を与えた可能性が高い。そのため小稿では、当該期芸術体験の具体相を彰かにするとともに、その学問的反映を、新カント派との関係を横にみながら追尋する。結果として、留学期を挟み、恒藤の芸術的認識をめぐる視点が従来の新カント派的なそれから「生の哲学」的なそれへと変化していることを示しつつ、芸術体験が、彼に個性的芸術価値の認識方法に対して反省を迫る機縁となった可能性を指摘する。しかもこうした傾向は、彼の学問的方法論全般における変化ともほぼ軌を一にしていることが重要である。つまり現地での芸術体験とは、彼が以後、新カント派から後退してゆくにあたってのひとつの間接的な契機をなした可能性があるのである。小稿は如上の指摘を通じて、恒藤の学問的発展における、あくまでひとつの背景を照らし出すことを試みるものである。

はじめに

いわゆる「戦後民主主義」の旗手として知られ、また法哲学者としても著名な恒藤恭(1888-1967)は、その思想ならびに学問的発展途上にもあたる1924年から26年にかけての約2年半を、「経済哲学」を主たる研究課題とした在外研究のため、フランスとドイツを中心とするヨーロッパに送った。その留学は実際には特定の大学で指導教授について研究に励むというよりも、両大戦間期にある西洋社会を見聞して周るといったいわば「遊学」的性格の強いものであったが、しかしその分、彼は現地で第一次世界大戦後の政治や社会の実態、思想情況をはじめ、様々なものに直に触れることとなる¹⁾。そしてそうした体験のなかのひとつに、各地における多彩な「芸術」文化との出会いもあった。恒藤

の留学期間中の動向については近年、彼自身の日記が翻刻されたことによって、一部を除いてはかなり彰かにされつつあるが²⁾、それによれば彼は西洋芸術の本場であるヨーロッパ各地において実に多くの芸術作品を鑑賞している。そしてかかる西洋での芸術体験が恒藤にとって大きな意味を有したであろうことについてもまた夙に指摘をされてきたところである³⁾。しかしながら、重要性が示唆されるにもかかわらず、その具体的な影響という段になると、これまでまったくといってよいほど省みられてはこなかった。だが苟くもかかる芸術体験が恒藤の思想形成に対しても何らかの意味を持った可能性が高い以上、彼の戦後にまで連なる思想的全体像を見定めるためにも、前梯の一段としてその内実を検討しておくことは決して無益な作業ではないであろう。従って小稿では、とりわけ彼の学問的認識の発展との関わりにおいて、その影響につき若干の考察を試みることにしたい。ただし、もとより芸術体験とはきわめて感性的な問題でもあるがゆえに明確な形での論証には限界があり、そのため小稿もまた仮説に留まって、研究ノートの域を出るものではない。しかしここではともかくもその検討を通じて、留学期恒藤の一側面を彰かにするとともに、ひいては新たに恒藤の学問的発展における、あくまでひとつの背景を照らしておきたいと念う次第である。

1 ヨーロッパにおける芸術体験の具体相

すでに従来指摘されてきたとおり、恒藤はもともと青年時代から芸術を愛好し、また単にそれを鑑賞するのみならず、自らも頻繁に絵筆をとりつづける芸術的気質の強い人間であった⁴⁾。実際恒藤は留学中にも一貫して絵筆をとり、多くのスケッチ類を残しているが、このような強い芸術的志向性が、西洋芸術の本場であるヨーロッパにあって彼を積極的な芸術鑑賞へと向かわしめたものと付度することができよう。それでは、こうした留学期における芸術体験とは具体的にはどのようなものであったのであろうか。まずはこの点につき大凡ながら概観しておくことにしたい。

恒藤が留学中に訪問ないし滞在した国は、ヨーロッパへの往路に寄港したアジアの国々や日本への帰路に立ち寄ったアメリカなどを除けば、フランスとドイツのほか、イタリア（現ヴァチカンを含む）、ベルギー、オランダ、イギリス、スイス、オーストリア、チェコスロヴァキア（当時）の各国である。しかしそのなかでもとりわけ芸術鑑賞を主目的とする傾向が強いのはイタリアの訪問であろう。恒藤自身のちに、「私是一九二四年の六月に、イタリアの見物を、それも、ルネッサンスのころの絵画を見ることを主たる

目的として（中略）イタリアに入つ」⁵⁾たと回顧しているが、事実、そこで彼は友人の長崎太郎とともに、約1か月をかけてウフィツィやブレラ、ピッティをはじめとする美術館や、ミラノ大聖堂やシステーナ礼拝堂など数多くの教会を次々に訪れている。この間の委細については関口安義の紹介に詳しいためそちらの参観を乞うが⁶⁾、それはまさしく「美術巡礼」と呼ぶにふさわしい旅であったといえよう。さりながら、だからと言って何もイタリアだけが芸術鑑賞の旅であったというわけではない。彼は留学中の主要滞在拠点としたフランスのパリではルーヴル美術館に何度も足を運んでいるし（なお、当時はオルセーやボンピドゥー、オーランジュリーなどの美術館は未だ開館していない）、もちろんノートル・ダム大聖堂やサン・ジェルマン・デ・プレ教会、ヴェルサイユ宮殿など様々な教会および歴史的建築物も多数訪れている。また比較的長く逗留したイギリスでは大英博物館やナショナル・ギャラリー、テート・ギャラリー、セント・ポール大聖堂をはじめ、幾つもの美術館や教会を断続的に何度か訪問し、芸術鑑賞に時間を費やしている。加えて、こうした比較的長期の滞在場所では造形芸術以外にもオペラや劇、音楽など、ミューズの芸術の鑑賞にも時々出かけていたようである。

しかし全体を通覧したとき、わけてもかような芸術鑑賞への傾斜を一層よく窺うことができるのは、短期間逗留した諸都市である。そこでは滞在日数に比した時の芸術鑑賞の割合が概して高くなる傾向にあるからである。その一例としてここでは1925年の秋におよそ3日半訪れたミュンヘンと、それにつづけて2日強滞在したウィーンでの主な訪問の性格を簡単に観ておけば⁷⁾、まずミュンヘンでは恒藤は、アルテ・ピナコテーク、ノイエ・ピナコテーク、グリプトテーク、市立ギャラリー、ドイツ博物館、プラーター島、平和の天使像を訪れている。観てのとおり、わずか3日半の滞在としては美術館施設見学の占める割合はきわめて高いといえよう。もちろんその見学の中心はヴィッテルスバッハ家収集の「絵画」と「彫刻」である。それに対してつづくウィーンでは、プラーター公園、シェーンブルン宮殿、宮殿隣接の馬車博物館、シュテファン大聖堂、王宮、そして美術史美術館の各所を訪問している。ここでは美術館施設の数こそ少ないものの、しかしわかるように、彼は美術史美術館を含めたハプスブルク家ゆかりの建築群を次々と訪ねて周っている。しかもここでは加えて、「Operplatz〔歌劇場広場〕にゆく。（中略）大学から議会、王宮へかけてのあたりは中々立派なので、感心する。」（1925年10月20日）などと感想を誌しているため、リンクシュトラーセ沿道の建築群を見て歩いていたことも彰かである。それらの大半は「世紀末ウィーン」、すなわち皇帝フランツ・ヨーゼフ1世とシシィの愛称でも知られる皇妃エリザベットの時代に建造された「歴史主義様

式」の建築群であり⁸⁾、これらの事態からして、ここでは彼は多数の「建築」芸術に親しんでいたと観て間違いないであろう。いずれにせよ、観たところからもわかるとおり、ミュンヘン、ウィーンそれぞれ約3日半と2日強というわずかな滞在日数に比して、そのなかでの意識的な芸術作品との接触率はかなり高いと言える。恒藤は留学期の終盤、妻・雅子に宛てて、「ルーブルの博物館だけでもとてもうんざりするほどいろいろのものがある。パリをはなれたら二度とみられない有名な絵や彫刻など、よくみておきたい気になる。」(1926年5月18日)⁹⁾としたためているが、短期間しか逗留しない、こうしたゆく先々の都市でもかかる気持ちが働いたことは推測に難くない。ただしもちろん、これはあくまでひとつの典例であって、都市によっては、たとえば学術上の理由から滞在したキールのように、充実した美術館施設や著名な建築をあまり持たないところもある。また法学者である恒藤にとり、芸術鑑賞が留学の唯一最大の目的であったわけでもないため、彼がすべての都市において毎日このような芸術鑑賞にばかり勤しんでいたというわけでは決してない。しかしそれでも彼の旅程全体を通覧する限り、やはりそこでは主要な関心のひとつが学問や政情などとともに、常に現地の芸術文化へと向けられていたことも疑いえない。

そのことを一層彰かにするため、厳密なものではないが参考までに、恒藤日記の記録に基づきつつ、イタリア訪問部分に関しては関口の長崎太郎日記の紹介も適宜参観しながら、恒藤が留学期間中に訪れた美術館施設や教会、その他歴史的建築物などの数を一応数値化もしておくこととしたい。ただし、日記が現存しない1926年の半年分の鑑賞数はカウントには入れていない¹⁰⁾。またすでに触れたことながら、ルーヴルやウフィツィ、ノートル・ダム、システイーナなど、なかには滞在中何度も足を運んだ美術館や教会も多数存在する。そのため実際に彼が芸術に接触した回数はここに示した数を大きく上回るであろう。しかしここではあくまで便宜上、1926年分を除いた約2年弱での、初回の訪問のみをカウントしておく、大凡は次のようになる¹¹⁾。

美術館・博物館相当施設 41 / 教会建築 45 / 宮殿・城・門などの歴史的建築 30 /
オペラ・劇・バレエ・音楽など 17 / 映画 6 / 展覧会 4

これに加えて、遺跡としての性格が強いことも考慮してここでは敢えて数えなかったが、たとえばポンペイ遺跡やフォルム・ロマヌム、フルヴィエールをはじめとする古代建築群も彼は見学をしている。また当然のことながら、どこの教会や宮殿でもそこには単に建築のみが存在しているのではなく、そのうちには宝物館や様々な絵画、壁画、彫刻などを有しており、それらを恒藤は見て回っている。反対にルーヴルやオペラ座など、

または先に観たウィーンの都市景観がそうであったように、ヨーロッパでは美術館や劇場、ひいては各地の大学や裁判所、市庁舎に至るまで、建物それ自体が時代を象徴する建築芸術であることも多く、やはり恒藤はそれらを見学している。更には彼がサロンやカフェで聴いた音楽の演奏や宮殿の庭園などもまたひとつの芸術と考えるならば、彼が実態としてヨーロッパにおいて触れた芸術作品の総数は、ここに挙げた数をはるかに上回る実に夥しいものとなるであろう。なかでもとりわけ絵画と建築の鑑賞数は群を抜いており、美術館相当施設に限った絵画鑑賞と、教会ならびに宮殿や城などの歴史的建築の鑑賞とを合わせた両者の訪問概数は、1926年を除いた初回の訪問のみでも優に100を超えている。

なお、ついでなので恒藤が日記に書き留めた名前に注目して、彼にとり特に印象深かったものと思われる作品の様式的傾向にまでここで言及をしておくならば、そこでは留学期を通じて、たとえば絵画では、イタリア訪問のあることも手伝ってか、一方でプロト期から初期、盛期そして北方にまでわたるルネサンス期全般の画家が多く挙げられるとともに、他方では自然主義から印象主義、ポスト印象主義を経て世紀末芸術へと至る19世紀後半の画家が概して多く挙げられていると言える。後者に関しては彼自身、「かねて複製でなじみの絵」(1924年6月12日)、「一ばんしたしみがあつた」(1925年7月9日)、「久しく複製でみなれた画」(1925年8月8日)、「名画集でかねてなじみの系のかずかずに出あつたのはうれしかった」(1925年8月21日)などと述べているように、それらは以前より複製画や画集等で慣れ親しんでいたものであったために、特別の親しみと感慨があつたのであろう。それにつづいて、オランダを中心としたバロックのオールドマスターや各国のロマン主義の画家が比較的多く挙がるといった具合である。加えて、イタリアでは「はじめて多くの中世の宗教画をみて感心する。」(1924年6月20日)とあるから、中世的美の世界をそこで発見していたともいえよう。また建築では、こちらは祭言を要すまでもなく、敢えて訪問した建築名からして圧倒的に教会建築の割合が大きく、そのため主にロマネスクとゴシック、そして時にビザンツやルネサンス、バロック様式の建築芸術に特に親しんでいたと見做すことができるであろう。

以上がごく大まかに観たときの、恒藤のヨーロッパ滞在期における芸術体験の性格であるが、いずれにしても、その数は「経済哲学」の研究を主目的とする留学としてはきわめて多いと言わざるをえず、この点からしても彼のヨーロッパ留学における現地での目的のひとつが西洋芸術の鑑賞にあつたことはほぼ間違いないといえよう。そしてかくあるならば、たしかにこれほどの意識的な芸術体験が恒藤に何らの影響も与えなかった

とは考えづらいことではある。特に青年期より芸術に親しんできた彼の強い芸術的志向性に鑑みるならばなおのこと、ヨーロッパでの芸術体験がその思想形成に対しても大きな意味を持ったと想像されてきたこともあながちゆえなきこととは言いえまい。しかし、とするならばそれは恒藤に対して、具体的にはいかなる形で影響を与えたと言えるのであろうか。次にはこの点に関して、あくまでその一端を学問的な次元に限定しつつ、その可能性につき考えてみることにしたい。

2 芸術体験の学問的反映

そこで、その学問的反映を観るべく、まずは恒藤が帰国ののちに執筆した著作群のなかから、特に美や芸術を主題的に扱った美学的論考を探してみることにしよう。そこには1928年7月に発表された論文として「芸術的観照における内面と外面」という論考のあることが見出される¹²⁾。これは恒藤が観照作用という直観的認識の在り方について詳しく論じたものであるが、その名の示すとおり、特に芸術的観照を直接的な論件として扱っている点で、留学後の芸術的認識の特質を示すものとして参考になるといえよう。よってここでは当該論文の内容をごく簡潔に確認しつつ、そのうえで更にそれを留学以前の美学的論考とも比較することで、その特色を浮き彫りにしておくことにしたい。

はじめに当該論文の内容を浚っておくと、恒藤はそこにおいて、単に数量的差異のみを示すにすぎない経済価値との比較において、それとは異なり個性的差異を有する芸術価値の特異性を指摘することから説き始めている。そしてかかる芸術作品の真空的小世界を支配する個性的価値を理解するための方法として、理論的理解作用および直観的作用たる観照作用の二種の存在を主張、ここで自らは専ら後者をこそ主題化した。のちにも触れることながら、この姿勢自体が従来の彼の関心の在り方からすればひとつの変化を示唆していて興味深い。とまれ、まずは内容を追っておくと、彼は芸術観照においては「芸術作品の観照作用は一個の作品については必ず一個の観照域を固持しなければならぬ」¹³⁾という根本的制約のあることを認めつつも、しかもかかる一個の「観照域」を有する芸術作品には、一個の「観照面」を有するものと二個以上のそれを有するものがあることを指摘している。そして前者の例として絵画や彫刻における観照の在り方を挙げつつ詳細に分析しながら、しかし彼はここでは特に後者のひとつとして、内外二個の観照面を有する芸術作品の場合を取り上げて検討した。その典型として挙げられるの

は建築や器物といった造形芸術であるが、彼はその際の観照作用の特質について次のように述べている。

観照作用に対して内面と外面とを呈示するところの対象の多くは、人間の実際生活の需要に応じて制作されたものであり、(中略)この種の具有する美的意味内容は芸術的純粋性において欠けるところがあることを免れない代わりに、その存在において人生一般と交渉する所が深く、その意味内容は現実の生活の内容の中に複雑に織り込まれるのを常とする。従つてわれわれが人生の諸形象について内面と外面とを区別し且つその相互的交渉を問題とする場合の思惟方法は、不知不識の間にこの種の対象の観照作用に対して影響を及ぼすのと同時に、その観照を通してあたへられる意味内容は、われわれの一般的思惟方法に対して暗黙の間に影響せむとする¹⁴⁾

そしてかかる思惟方法の一例として彼は、人が身体の内部に主観的精神や魂など、実体的なものの活動を意識したり、あるいはかような思惟の在り方を無生物的对象にまで投射して、事物のうちに「本質」なるものを設定しようとする意識の傾向を挙示している。これはもちろん日常的意識レベルでの話ではあるが、しかしこうした現象とは換言するならば、たとえば器物の形状が示す器物の本来の用途という「目的」が、ある意味その器物の「本質」をなすとも見做しえるように、作品の観照に際して、いわゆる内的観照面が「目的」や「価値」の観点と密接に関連しつつ表れるということを示している。従って恒藤は言う。

個々の実在的对象に対して客観的意味を付与する根拠たる価値または理想は、対象を構成する感性的実在要素の中に見出されるものではない。そこで、直接に知覚されえないところのもの、直接の知覚の及び得る限界の彼方に在るところのものを内面的世界に属するものとして視ようとするわれわれの思惟傾向は、価値または理想をも内面的なるものとして視、之を外面的なる実在的事物に対立せしめる。そしてかやうな考へかたは、主観的意識及び実体として精神を内面的なるものとして視ようとする思想態度と結合されがちである。¹⁵⁾

つまりそこで言われていることとは、「実在」としての対象作品のうえに表れてその意義づけをおこなう「価値」の顕現の在り方それ自体が、作品の観照主体である人間の「意

識」や「思想態度」の在り方との相互関係によって強く制約をされるということである。その典例として恒藤が挙げているのはヨーロッパ、キリスト教社会における教会建築であるが、たしかにキリスト教精神や信仰と教会建築との関係を考えればそれは容易に理解されえる事態であろう。かくして、かかる芸術とその個性的な価値世界を真に観照し、理解するためには、意識や感情、体験といった人間生活の側からもその観照域に迫ることが必要となるのである。

一つの観照域に内外二様の観照面の併び存在するやうな芸術的作品の構造は、物理的空間の性質、作品の構成物質の性質及び人間の官能特に視覚的官能の性状にもとづいて成立するものであるが、内的観照面と外的観照面との対立の意義は、物理的諸現象及び心理的諸現象の方面からして理會されるだけでは充分でなく、この種の作品の存在を生み出したところの實際生活の要求についてかへりみ、われわれの現実の生活を常に支配してゐるところの——種々なる意味において内面的なるものと外面的なるものとを区別し、互ひに対立せしめる思惟方法の見地からしても説明を企てることを必要とするであらう。斯やうな考へかたを用ひるときは、この種の作品においては、隔離の限界に存する何程かの間隙をとほして、その内側の世界に外部の人生から生まれた若干の意味要素が流れ込み、純芸術的意味要素と混合して観照域に留まるために、内的観照面と外的観照面との対照が一層顯著なる色彩を帯びる（中略）人間における精神的性状と肉体的性状とは、異なる性質の様相を示すものであり、これら二様の性状のさまざまな結合の仕方は、独自の対象として視られた個人の個性的内容を定めるための重要な因素を成す。建築物や器物やにおける内面と外面との対照は、人間における内面と外面との対照に何程か平行した意義を有するものであり、芸術的内容にみたされた独自の世界の個性を形成する上に、特有の機能をいとなむのである。¹⁶⁾

作品の観照にあたり人間の生活体験や感情移入作用、そしてそれに対して大きな意義を有する「意識」の働きを重視するという点で、ここで恒藤が示した芸術的観照理解の在り方とは、実に主体的性格の強いものであったと言えるであろう。

さてそれでは、如上の理解を今度は1920年代前葉、すなわち留学以前の段階のそれと比するならば、そこにはいかなる相違が見出されるであろうか。紙幅の都合上ここで詳しく論ずることはできないものの、しかし検めて両者を概観するならば、そこにはたし

かに若干の変化を観取することができると思われる。それは、まず何より芸術価値や芸術作品の認識を考察するに際しての視点と関心の変化である。というのも、先にも少し触れたように、そもそも20年代前葉の段階ではかような問題を考察するに際しては、その検討対象は恒藤言うところの「観照作用」よりもむしろ「理論的理會作用」¹⁷⁾のほうに大きく傾斜しており、そこでは「直観作用」ないし「観照作用」は主たる考察対象とまではなっていなかったからである。たとえば次の文章は彼が渡欧直前の1924年2月に発表した、自然美と芸術美をめぐる美学的論考の一節である。

実在的对象がそのうちに自覚的に産出された美的価値を内住せしめてみると認識される限りにおいて、その対象は芸術品たる意義を有する。(中略)但し或る対象が芸術品として認識され又は或る行動が芸術的行動として認識される場合に、美的価値をその対象なり行動なりと関係せしめると云ふのは、認識者がその対象に内住するものとしての又はその行動によつて産出されるものとしての美的価値を、価値観照又は価値判断の態度において問題としてゐるのではなく、全く論理的に理解された美的価値の意味が認識を指導することを、表明するものである。¹⁸⁾

そこでは芸術作品の認識が、観照あるいは直観の問題としてというよりもあくまで論理的認識作用の問題として把握されている。つまり簡潔に言うならば、20年代前葉における恒藤の美学的論考にあつては、その関心の比重が新カント派的な論理主義と価値関係主義に基づく、「自然価値」との対比で見られた「芸術価値」そのものの成立過程の記述、およびその構造分析、すなわち論理的外延と内包とを画定する作業に傾斜していると言える。よく知られるように、20年代前葉の恒藤は主として新カント派の研究に精励しており、なかでもハイデルベルクの西南ドイツ学派に対する傾倒は強かった。それは「文化主義」の流行した当時の日本思想界全体にある程度共通した傾向とも言えたが¹⁹⁾、現に恒藤の美学的論考にあつてもその基礎には西南ドイツ学派的な「価値哲学」が横たわっており、とりわけここではリッケルトとラスクの方法論に非常に大きな意味が見出されている²⁰⁾。従つて20年代前葉における恒藤の美学的的方法論は確実に新カント派、それもコーエンやナトルプのようなマールブルク学派のそれよりも、むしろ西南ドイツ学派の方法論に立脚して展開されていたものと観ることができる²¹⁾。

それに対して1928年の段階では、それらの議論をふまえながらも、しかしそこでは芸術価値の論理主義的理解より、芸術作品の「直観」ないし「観照」作用の側の分析にこ

そ重点がスライドしている。これは恒藤における関心の変化を示唆するものとして興味深いといえよう。しかもそれと関わって、ここではそれが、観照主体たる人間の生活体験や意識作用の側との有機的な相互連関から説明されようとしているのである。このような説明は同じく芸術と生活との連関を説くとは言っても、単に芸術「概念」の厳格な論理的弁別のうえに言われる20年代前半のそれ²²⁾とは視点が異なる。たしかに依然として「価値」と「実在」の二元的区分など、そこには新カント派的な枠組みが前提とされてはいるものの、しかしかかる「体験」や「意識」に重点を置いた説明は、従来の論理主義の立場からだけでは導きがたい。従ってこの限りでは、そこに観られる視点や手法は、彼が定位してきた合理的な新カント派のそれというよりもむしろ、たとえば、文化現象を人間の「体験」の表現として捉えつつ、「意味」ないし「価値」を介した全体的作用連関たる生連関の「了解」によって把握しようとしたディルタイ流の「生の哲学」に近いといえよう。事実恒藤は留学期を経て新カント派から後退、その学問体系に当時ヨーロッパで流行していた様々な諸思想を批判的に摂取してゆくようになるが、そのなかに現象学や実存哲学などと並んで、ディルタイら「生の哲学」のそれが強く入っていたことも恒藤自身によって示唆されている²³⁾。そしてまた以後、恒藤はその学問的方法論において「直観」が有する重要性を強調してゆくようになるのである²⁴⁾。もちろんそれが厳密にディルタイのそれであるかは別途精査を要する論件であるが、様々な芸術体験やその反省が、論理や理性のみでは把握しえない非合理的ものの働きをも汲み取ろうとしたディルタイ流の考え方と共鳴する可能性はあったと言えるであろう。

しかし今はそれはさて置き、ともかくもここで重要なのは、事実として恒藤の芸術的認識をめぐる分析の視点に、留学以前と以後の間では若干の変化が見受けられるということである。後年、恒藤の高弟でもあった法哲学者の加藤新平は、恒藤の学問的性格を解説するなかで以下のように述べている。

論理的分析の土台と背景に、又分析作業遂行の過程と先端において、随所に直観が働くことは当然である。先生（恒藤—引用者）もまたこの直観の作用の重要性をあちこちで強調してられるが、先生の場合、それがいわば芸術的観照の色調を強くたたえた全体直観に裏うちされているという気がしてならない。（中略）私には、先生の思惟様式を規定し思想構造の大きな背景をなすものとして、芸術的観想的なものがあのではないかと思われる。²⁵⁾

加藤もまた恒藤の学問理論の背後に芸術的な観想や直観が息づいていることに気がついていた。しかし加藤が指摘するかような恒藤の学問的性格とは、原則 1920 年代末葉から 30 年代以後の恒藤法理学に強く見受けられるものであり、それ以前の研究には概して稀薄なものである。実際、加藤がここで解説を加えた恒藤の著作群もまた、それはあくまで 20 年代末から 30 年代半ばにかけてのものであって、それ以前のものではないのである。

そしてそうであるとするならば、その間には恒藤の学問的性格や認識の在り方を変化・発展させるうえで何らかの契機が存在したものと考えられてしかるべきであろう。もっとも、それをここで、短絡的に留学期における芸術体験と直結させようというわけでは決してない。しかしながら、たとえば先の「芸術的観照における内面と外面」のなかで恒藤が描く次のような場面には、彼が感銘を受けたミラノ大聖堂や幾度も訪れたノートル・ダム大聖堂、そしてケルン大聖堂やシュテファン大聖堂など、恒藤自身の西洋での実体験が色濃く反映していることもまた思わずにはいられないのではなからうか。いささか長くなるが一例として全文引用しておくこととしたい。

中世的形態を多分に保持したままに、群集せる周囲の民屋を圧して空高くそびえ立つゴシック風の寺院の外観は、価値に乏しい世俗の生活の世界から意味ふかき信仰の生活の世界を隔離するための限界として役立つにふさはしい威厳にみちてゐる。前面の広場に立ちつくして幾ばくかの時をその目ざましい外観の鑑賞につひやした後、人の手垢に黒光りのする扉を押して一步を内部に踏み入れるならば、明るい外光に慣れた眼はしばらくそのはたらきを止め、急激な対境の変化のために意識は中心の一点に凝縮しようとするであらう。やがてうす暗がりに漂ふ光明に照らし出されて、穹窿形の天井や、それを支へる円柱の数列などをはじめ、諸々の形象と色彩とが浮き上り、静寂の美にみちた世界が深く且つ高く展開し来るであらう。直観はしづかに併しいそがしく作業をいとなみ始める。ほのかに明るくひらかれた空間の中に並行し、交錯し、旋回し、重畳するところの無数の直線及び曲線、それらによつて形成される正方形や、矩形や、円形や、卵形や、円錐や、角錐やの数知れぬ形象の上に、直観の作業はきづかれて行く。それと共に建築的意味の統一性がはつきりと意識の前に現れ、この統一性に従へられた一切の形象を支へるところの永遠に安固なるもののうちに、感情はすべての屈託をあげて憩はうとする。かなたの観照面においては左したる意味をもあらはさなかつた窓のロザリオが、こなたの

観照面では此の世ならぬ美しさに輝いて、内面的なるものの栄光を示す。しかし足もとに黙々とひろがる石敷の平面から湧き上がる意味内容が力強くわれわれの意識に迫つて来る事実を、人は気づかないで佇んでゐるであらう。やがて一步々々を心して踏み出しながら側廊をあゆんで行くと——肉体につながれた主観的意識の意味における内面性、斯かる意識の支持者としての靈魂の意味における内面性——さうした内面性の諸相を渾然として融合し象徴するところの観照面が上下四方に肅然としてひろがる中に、こなたの石柱のかげ、かなたの聖像の下に跪いて黙禱をささげる人たちの影を見出すであらう。やがて煩しく物さわがしい世俗の生活に充ち満つる一切の外面的なものから完全に隔離されたといふ意識、限りなく奥深い世界に通ずる空間の内面に完全に包容しつくされたといふ意識、さもなくば其れに類似した意識が自らのうちにも湧き出るのを覚えるであらう。²⁶⁾

これはまさに自らの体験を彷彿とさせるかのような実に迫真的な描写である。少なくとも恒藤が直観作用についてのかかる具体的描写をおこなうときに、ヨーロッパでの実体験を想起していなかったということは考えがたいことである。

このように観てくるならば、如上の留学期における「芸術体験」が恒藤の学問的認識の在り方に対しても何らかの影響を与えていた可能性はやはり高いと言えるのではなからうか。もともと芸術に対する感性の鋭かった彼は、西洋芸術の本場における数多くの芸術鑑賞とその反省を通じて、新カント派的な枠組みだけでは把えきれない、「連鎖的」で水平的な経済価値などとは異なる、「真空的」で垂直的な芸術的価値の世界と²⁷⁾、その成立に果たす「直観」や「観照」作用の重要性を再認識したのではないか²⁸⁾。少なくとも彼の芸術的認識における視点が留学を挟んで変化を見せ始めていることは疑いえず、しかもそうした傾向が彼の当時の学問的方法論全般における旋回過程²⁹⁾と連なっていることも間違いない。とするならば、この限りにおいては、かかるヨーロッパにおける直接的な芸術「観照」の「体験」が、その他思想的体験とも並んで、彼の新カント派的方法論からの後退、あるいはその後彼が摂取してゆくことになるヨーロッパ諸思想への接近に対しても、あくまでひとつの間接的な契機をなしたと推測することは許されるであらう。その点でヨーロッパでの芸術体験とは、彼の思想的発展に対しても決して単純には無視しえぬ意義を持っていたと言わなければならない。

結びにかえて

以上、従来放置されてきた恒藤の留学期における芸術体験の具体相とその学問的な影響について若干の検討を加えてきた。文字どおり、大胆な憶測を重ねてノートに終始したものであるが、しかしそれによって、何より彼の留学期の具体的な一側面を照射するとともに、また併せて、その芸術体験が彼の認識枠組の修正に対して有した可能性についても指摘はしえたことと念う。もっとも、芸術体験とはそれ自体は非常に感性的なものであるがゆえに、その影響も一層人格的次元に深く関わるものであって抽象的な学問や理論の次元にのみ留まるものではない。また、恒藤の新カント派との関係を考えるに際しても、芸術体験がそこからの後退の直接的引き金になったなどと言うつもりも毛頭ない。この点については以前拙稿でも言及したことながら、それは当時の恒藤の主体的な課題意識と彼が置かれた時代の状況、そして両大戦間期ヨーロッパの激動する社会状況やそれと連動して生成する新しい学問理論との出会いからこそ総合的に導かれるべき事柄である³⁰⁾。しかしながら、こうした西洋社会や時代との対面のなかに、西洋精神の感性的精華とも言える「芸術」文化との絶えざる接触と深い対話が存在したこともまた事実なのである。そしてそうである以上、その体験を彼の留学期における思想経験やその後の学問形成の過程からまったく捨象し去ってしまうことも精神的考察としてはおよそ適切とは言えないであろう。いずれにしても、従来、恒藤の新カント派との関係は法学、歴史学両分野において問題となってきた案件であるが³¹⁾、それを含め、その思想形成過程全体へのアプローチはより複眼的かつ総合的な視野からなされる必要があると考えられる。彼のヨーロッパにおける芸術体験もまたそのひとつとして位置づけることができるであろう。

注

- 1) この点に関しては、たとえば中村奈々「恒藤恭のヨーロッパ留学と1920年代認識」『Lutèce』2006年、拙稿「ハイデルベルク留学を通じてみる恒藤恭と「新カント派」—1924年渡独時資料を手がかりとして—」『大阪市立大学史紀要』2013年、などを参照されたい。
- 2) 恒藤記念室編『恒藤恭「欧州留学日記」(1924年)・恒藤恭学長式辞集』大阪市立大学大学史資料室、2013年、および同『恒藤恭「欧州留学日記」(1925年)』2014年。ただし、1926年部分に関しては日記自体の現存が確認されておらず、不明である。なお、小稿にて日記からの引用をおこなう場合には、その直後に引用した記述の年月日を誌す。
- 3) たとえば関口安義は、恒藤が「旅や美術館めぐりから得たものはいかに大きかったか。」と、

その体験の重要性を指摘している（関口安義「恒藤恭と矢内原忠雄」『大阪市立大学史紀要』2013年、13頁）。

- 4) 恒藤の青年時代の水彩画については、熊田司「恒藤恭—若き日の水彩画をめぐって」『大学史資料室ニュース』大阪市立大学大学史資料室、2005年3月、4-9頁参照。
- 5) 恒藤恭「石の感触」『現代随想全集』27、東京創元社、1955年（初出不明）、173頁。
- 6) 関口安義『恒藤恭とその時代』日本エディタースクール出版部、2002年、248-264頁参照。
- 7) 本来、MünchenとWienは、正しくは「ミュンヘン」および「ヴィーン」と表記すべきであろうが、ここでは近年の通例に従って、それぞれ「ミュンヘン」、「ウィーン」と表記する。
- 8) 実際恒藤ならずとも、当時においては、都市のあるべき理想としてイメージされていたものを実現したリンクシュトラッセ（環状道路）とその沿道に林立する「歴史主義様式」と一括りにされるそれらリヴァイバル建築群には、多くの人間が圧倒的な印象を受けていたと思われる。このことはたとえば建築学を志す若き日のヒトラーが美術史美術館やオペラ座、国会議事堂など、リンク沿道の建築群に多大な感銘を受けた有名な事例からも知ることができよう（宝木範義『ウィーン物語』講談社、2006年、117-125頁、田口晃『ウィーン都市の近代化』岩波書店、2008年、56-78頁参照）。
- 9) 恒藤恭、雅子宛書簡（1926年5月18日）。ここでの引用は更にそれを雅子自身が筆写したノートからのものである（恒藤記念室蔵）。
- 10) 日記自体は現存が確認されていないが、しかし恒藤は1926年にも相変わらず訪問する先々で教会などを訪れていたと思われる。たとえば彼が帰国直後に発表したエッセイ「ディーニュの町」（『文藝春秋』1927年6月、のち恒藤恭『復活祭のころ』朝日新聞社、1948年に収録）では、ディーニュでノートル・ダム・ド・ブールを見学を訪れたことなどが詳しく回想されている。
- 11) ここで言う美術館・博物館相当施設には、美術館や博物館、宝物館のほか、ゲーテハウスやベートーヴェンハウス、レンブラントの家など、記念館的な施設も含めている。また建築芸術については、恒藤は単に外から眺めているだけながら、それでもたとえばイギリスの国会議事堂の荘厳さに見とれたように、それらから強い印象を受けた場合も多い。しかしここでは便宜上、原則として建築物のうちに入らなくて鑑賞したことが確認できるもの、ないしはほぼ明確にその建築物の訪問を目的としていることがわかるもののみを数に数えている。加えて、たとえば斜塔や大聖堂などが居並ぶピサのドゥオーモ広場のように、なかには敷地内に多くの著名な建築が存在する場合も多々あるが、この場合は原則、全体でひとつの訪問場所としてカウントをしている。
- 12) 恒藤恭「芸術的観照における内面と外面」恒藤恭『型による認識』勁草書房、1950年（初出は『改造』1928年7月）。
- 13) 同前、123頁。
- 14) 同前、134-135頁。
- 15) 同前、141頁。

- 16) 同前, 147-148 頁。
- 17) 同前, 123 頁。
- 18) 恒藤恭「自然美と芸術美」恒藤恭『価値と文化現象』弘文堂書房, 1927 年 (初出は『改造』1924 年 2 月), 36-37 頁。
- 19) 1910 年代からとりわけ 1920 年代にかけての日本思想界に対する西南ドイツ学派の影響については, ヴィンデルバントやリッケルトらを目指して多数の知識人がハイデルベルクに留学する, いわゆる「ハイデルベルク詣で」という現象が起こった事実によっても裏づけられる (Vgl. Wolfgang Seifert: Heidelberg's Wirkung auf japanische Studenten in den 1920er Jahren, in: P. Meusburger und Th. Schuch (Hrsg.), Wissenschaftsatlas der Universität Heidelberg. Knittlingen 2011, S.308f.; Wolfgang Seifert (Hrsg.): Japanische Studenten in Heidelberg. Ein Aspekt der deutsch-japanischen Wissenschaftsbeziehungen in den 1920er Jahren. Heidelberg 2013.)。
- 20) 恒藤恭「価値の類型と個性」恒藤『価値と文化現象』(初出は『経済論叢』1923 年 4-6 月), 91-110 頁参照。なお, 前掲の「自然美と芸術美」論文における「自然価値」と「芸術価値」の相違も彰かに, この「価値の類型と個性」論文で示される「価値類型」と「価値個性」の区分を土台として展開されている。
- 21) もっとも, 恒藤はその法理学理論においては, 西南ドイツ学派のラスクとともに, マールブルク学派のシュタムラーにも大きな影響を受けている。ただし価値論と認識論に基づく「価値哲学」への依拠や自然科学と文化科学の方法論的差異の強調など, 全体的な哲学的世界観および方法論は圧倒的に西南ドイツ学派からの影響が濃厚と言える。
- 22) 恒藤「自然美と芸術美」恒藤『価値と文化現象』, 49-62 頁参照。
- 23) 恒藤恭「法の本質とその把握方法—(併せて)法と政治と国家との相関性について—」恒藤恭『法の基本問題』(再刊版)岩波書店, 1969 年 (初出は『法学論叢』1932 年, 1・3・5 月) 52-55 頁参照。恒藤はそこで, たとえば次のように述べている。

歴史の世界の認識方法が問題とされる場合に, 自然科学的認識とのするどい対照において歴史科学的認識の方法的性格を規定しようとしたリッカートの功績に連想を及ぼさざるを得ないが, この点に関してリッカートは歴史的認識方法の論理的作業その者に注意を集中させるために, 歴史の世界の構造を明らかにし, それとの有機的連関において歴史的世界像の形成方法の性格を洞察する態度をとるに至ってゐない。法の本質の問題を正しく解決するための発足点を確立せむとする意図において, 歴史の世界の構造を究明しようとする場合に, 歴史の世界を以て客観的精神の表現の舞台と観たヘーゲルの哲学は, 我々に対して深き暗示をあたへる。更に, ヘーゲルの影響を被りつゝ, この方向における理論の新しき発展を企てたところの唯物史観の学説, デイルタイ, ジュメル, シュブランガー, リット, フライアー, シェラー, ハイデッガー等の人々によって代表され得るやうな, 生の哲学, 現象学的文化哲学, 及び解釈学的現象学等の諸学説も, 其際我々を啓発する所が大である。(中略) 理性は決してそれ自らはたらきのみによつて社会的現実を形成し, 展開する力をもつものではない。物

質的自然の提供する原動力のはたらきを通じてのみ、理性的なるものは現実的なるものうちに顕現することが出来る。だから、ヘーゲルによつて稍ともすれば単なる受動的・消極的原理として軽視されがちであつたところの有機的なる生の動能が、歴史の世界の生成に関して演ずる役割の重要性を高調せるディルタイやジムメルヤの見解の妥当なる点が十分に考慮されることを要する。

また余談ながら、恒藤は留学中、ハイデルベルクにおいては、ディルタイに直接師事したエーリッヒ・ロータッカーの講義などにも興味をおぼえて聴講していた（拙稿、2013年参照）。

24) 同前、88-90頁参照。たとえば以下のごとくである。

自然的存在の事實的・經驗的形態を直観する作用と、歴史的存在の事實的・經驗的形態を直観する作用とは、本質的に趣を異にするものであるから、それに対応して、自然的存在の本質を把握する仕方と、歴史的存在の本質を把握する仕方とは、原理的に相違する所をもたざるを得ない。（中略）歴史的存在の（中略）超対象の対象性に適応しつゝ、存在形態を把握する非感性的直観（又は歴史直観）は、社会生活における実践の立場において我々の路程を照らし、我々をとりまく生活環境の様相をあきらかにする所の直観に他ならぬのであつて、歴史科学的認識も斯かる直観のはたらきを前提とするのであり、歴史的存在の本質の把握も斯かる直観の立場から出発しなければならぬ。

25) 加藤新平「あとがき」、同前、492-493頁（なお、本書の初版は1936年であるが、1969年の再刊に際して加藤の当該解説が附された）。

26) 恒藤「芸術的観照における内面と外面」恒藤『型による認識』、142-143頁。

27) 同前、122-123頁。なお、恒藤が建築芸術について思惟するにあたり、よく留学期の体験を想起していたことは次のような石造建築についての記述からも窺うことができる。

西洋人の生活と石造の建築物との間には、極めて密接な関係が見出される。ことに、地中海に沿うたヨーロッパの国々の社会ならびに文化の場合には、想像以上に重要な意義を石造の建築物はもつて来たのであるし、且つ現在でも持つている。はじめて此の事を私がつくづくと感じたのは、イタリアの旅をして、あちこちの都市を見物してまわつた時のことであつた。（恒藤「石の感触」『現代随想全集』27、172-173頁。）

28) もともと新カント派的な思考様式を身に着ける以前の青年時代における恒藤の芸術的認識にあつては、素朴なものながら、直観や感情移入による把握を重視する傾向があつたと思われる。それはたとえば、彼が第一高等学校時代に執筆した絵画論（井川（恒藤）恭「絵画論」恒藤記念室編『向陵記—恒藤恭 一高時代の日記—』大阪市立大学大学史資料室、2002年、476-477頁）などにも観取することができる。そしてこれには加藤も示唆するように（加藤前掲「あとがき」恒藤『法の基本問題』493頁）、当時の恒藤がその「人生観的思索」のなかで出会つたベルクソンの影響も一面では考えられるであろう。恒藤は一高時代、精神的ないくつかの問題を抱えており、それとの格闘の文脈においてベルクソンの『意識に直接与えられたものについての試論』すなわち『時間と自由』と邂逅、その「純粹持続」の

哲学に大きな感銘を受けて懊悩から脱却するという経験を有している（なお、この点については広川禎秀「一高時代の恒藤（井川）恭と「向陵記」—若き理想主義的自由主義者の誕生—」（前掲、恒藤記念室編『向陵記』所収）を参照のこと）。ただし、20年代後半恒藤が自らの学問を発展させるうえで摂取してゆく哲学理論のなかにはベルクソンの存在は直接的な形では見出せず、そこではむしろ生の哲学や実存哲学、ヴェーバー社会学など、彰かにドイツ系思想の影響が色濃い。

- 29) この点についての詳細は、拙稿、2013年の参観を乞う。
- 30) 同前。
- 31) この点についての先行研究をめぐる概観に関しては、同前、20-22頁を参照されたい。

